

隠喩としての怪物^{モンスター}

——メアリ・シェリー『フランケンシュタイン』

の多義性^{アクチュアリテイ}と今日的意義——

柴田 庄一

はじめに

俗に、世間で怖いとされるものの代表的事例を言い表わすことばのひとつに、「地震・雷・火事・親父」というもの尽くしがある。その序列の当否はさて措くとすれば、前二者は自然現象であれば言わずもがな、後のふたつも、なにがしか、ひとが介在した具体的人事という相違はあるというものの、どちらの場合も、容易には人の手に負えない、始末に困った存在であるというところにその共通性を見て取ることができる。それらは、いずれも、尋常の範囲を超脱した不可抗力を具えており、これらを首尾よく制御するには、人知を超えた膂力を必要とし、ひとたび遭遇するともなれば、たちまち立往生を余儀なくされるか、ただただ茫然自失するしか他に術がないという、実に、困り果てた存在事象に他ならないのである。そうだとすれば、上のようなもの言いからは、これらの恐怖にどう対処すればよいかといった、合理的な生活の知恵を伝授しようとする気配を嗅ぎ取ることすら無理な相談というものであろう。ここには、むしろ、そうした事態の出来は日常茶飯のことであり、それゆえに、これらが暴威^{ふる}を揮った暁には、ひたすらその後始末を心掛けることこそ得策であるという、近代以前の日本人に特有の「諦念」の想いを読み取っておくべきなのかも知れない。

では、それにひきかえ、近代以降においてはどうなのであろうか。自然事象

をも含め、あわよくば、ものみなすべてを人間精神の支配の下に置こうとしないではいられない近代人にとって、森羅万象のことごとくを人為的に造り出せると思いなしたとしても、決して不自然な成り行きというものではなかったであろう。ところが、翻ってよくよく考えてみるならば、人類社会がその倨傲によって自ら生み出しておきながら、人間の力をもってしては容易く制することができないもの、それこそが、実は、もっとも怖いものなのかも知れないのである。¹⁾

すでに近代の科学革命に先立つ 19 世紀初頭、ともすれば、さかしらに奔り、驕慢にも流れかねない近代科学者の心性に一石を投じた文芸作品がある。フランス革命とナポレオン戦争の記憶がいまだ生々しい時代状況にあって、ありったけの空想の翼を羽ばたかせ大胆な想像力の飛翔に身を任せて紡ぎ出された『フランケンシュタイン あるいは現代のプロメテウス』（現行第 3 版は 1831 年刊行、初出は 1818 年）がそれである。この作品は、当時、親交のあったロマン派の詩人バイロンやシェリーに触発された弱冠 19 才の女性メアリ・シェリーの手になる後期ゴシックロマンの代表作のひとつとされるものであるが、ここでは、その原典を読み解きながら、同時に「フランケンシュタインの怪物」像が描き出す、意外にも広範な、その射程距離をも見定める考察を試みたい。²⁾

1. 「フランケンシュタインの怪物」とそのイメージ

ヴァルター・ベンヤミンの慧眼を俟つまでもなく、まず第一に「複製技術の時代」であったとも称すべき 20 世紀を生きた人間にとって（— それはまた、21 世紀の前半を生きる人たちにおいてもさほど事情は変わらない筈であるが—）動画やスチール写真の及ぼす強大な影響力を度外視して済ませることは難しい。それゆえ、たとえ原作本を繙いたことはおろか、その存在をすら知らないような人たちでさえ、「フランケンシュタイン」という固有名を一度として耳にしたことのない者は、ほとんど皆無に等しいのではないかと思われる。じじつ、『フランケンシュタイン』は、原典の初出以来、幾度となく芝居や映画としても上演されてきており、各種媒体での翻案やパロディーをも含めると、ほとんど枚挙に暇のない膨大な数に上っている³⁾（— 因みに、一般によく知られた映画版を指折り数えてみるだけでも、たちまち十指に余る盛況ぶりである—）。なかでも、扁平で大きく際立つ額、落ち窪んだ眼窩、身の丈 8 フィートにもおよぶ巨漢にして容貌魁偉、蒼白な顔面の縫合痕も生々しい怪物モンスターの記号イ

メージは、1931年度製作の映像作品『フランケンシュタイン』によって定着したものと言っていい（— このハリウッド映画は、現在、廉価版のDVDによっても容易に視聴することが可能である —）。とりわけ、ボリス・カーロフ扮するモンスターの形姿は、様々なメディアを通じて世界的に喧伝され、^{あまね}普く人口に膾炙したので、単にスチール写真を覗き見ただけの人であっても、その独特のイメージの呪縛力から脱しうる可能性は、むしろ少ないのではないかと考えられる。その結果、おそらくは、重々しい名前の響きと忘れがたい容貌とが不思議にマッチしてのことであろうが、怪物の名前こそフランケンシュタインだと誤解している向きもまた決して少なしとはしないようである。とはいえ、それは、半知半解の錯覚という以上のものではない（— もっとも、それもまた、後に見るような理由で、必ずしも不当であるとばかりは言えないにしても —）。実は、「そいつ」(It) と呼ばれる人造人間には、一切、名前が与えられていないのが実情であって、^{モンスター}怪物を人工的に作り出したとされる張本人こそ、ヴィクター・フランケンシュタイン自身に他ならないのである。

2. ヴィクター・フランケンシュタインの生い立ちと生命学者への道程

しかしながら、何よりもまず確認しておくべきは、（— とかく錯覚されかねないものであるとはいえ —）フランケンシュタインが、初手からいかにも怪しげな死神博士として登場しているわけではないという一点であろう。むしろ、ジュネーヴの裕福な良家の子弟として生まれ、何不自由の一つとしてない幼少年時代を過ごした後、17歳から、インゴールシュタット（現、南ドイツ・バイエルン州）大学で自然科学の研究に勤しむ少壮学徒のひとりであるヴィクターは、決して特異な生い立ちに崇られた人物ではない。それゆえに、時には激しい狂熱や逆らいがたい欲望に駆られるところがあったにしても、そのことを、その前歴において、辛酸を舐め尽くしてきたせいなどに帰することはできない。それどころか、彼は、「自然の隠れた法則を知りたがる真面目な研究心」(48)を^{いだ}懐いて錬金術や神秘学者の著作に取り組み、これまで神秘とされてきた生命の根源を探るかたわら、さまざまな契機や偶然を通して、いつしか、神の領域をも侵さんとするマッド・サイエンティストにならうてゆくのである（— したがって、こうした事態は、仮に条件さえ^{ととの}調うなら、他の誰にでも容易に起こりうるものであることを示唆している —）。

ヴィクターは、ひたすら化学に打ちこむ二年間を経て、すでに「教授たちの

教えから学びうるだけの、理論も実技も身につけてしまった」(66)とされるころ、さらに生理学の分野にも首を突っ込み、「昼も夜も信じられぬような苦心と疲労をかさねたすえ」「発生と生命の原因を解き明かすことに成功した、いえ、それどころか、この手で無生物に生命を吹きこむこともできるようになった」(68)のだという。かくして、「十一月のあるわびしい夜のこと」(74)、「夜な夜な微熱になやまされ、神経過敏でひどい苦痛を覚え」(73)ながらも、納骨堂から骨を集め、解剖室と屠殺場から材料を得て、ついに人造人間の製作を成し遂げるに至るのだ。もとより、作中には、(— 往々にしてこの種の場面に通有のことであるが —)まさに人間を造り出すその瞬間、すなわち生と死の境界をどう跨ぎ越したかといった、臨界に関する克明な描写は見当たらない。なぜなら、ヴィクターは、その刹那、「狂乱にも近い衝動」(71)に衝き動かされ、まるで熱病にでもうなされたような状態に陥っていたとされるのだからである(— その直後、彼は、自らの分身を産み落とした出産の疲れと労苦を暗示したものででもあろうか、何と数ヶ月もの間、病床に着くことを余儀なくされる⁴⁾—)。

いずれにせよ、ここで敢行されているのは、前近代の錬金術師たちが秘めていたであろう野望だけはそのままに、同時に近代的自然観とを巧みに接ぎ木しようとする一種の離れ技に他なるまい。だが、それは、天然自然の諸力に相対し、調和や循環を第一義に、これらを十全に生かそうとしていることを意味するものではない。そうしたこととはむしろ逆に、天地山川の潜在力をあくまでも操作対象として客体視し、(— たとえ、人類に貢献するのだという「善意」に発してではあるにしても —)任意に蹂躪して憚らない考え方が、ヴィクターの行為を通じて、単に表明されるばかりか、また実践されようともしている点が見落されてはなるまい。ここには、明らかに「自然力」を単なる用材として人間支配のもとに置こうとする操作的自然観が、大きく前面に押し出されているのである。⁵⁾

3. 人造人間による惨劇とその犠牲者ならびに隠喩としての「怪物」^{モンスター}

無生物に生命を吹き込むこと、しかのみならず、新たな人間生命を人工的に造り出すこと、それは、日進月歩の科学技術をもってすれば、いずれの日にか、やがて可能となるものとするべきかも知れない。とはいえ、ひとは、ただこの世

に生れ落ちたというだけで、ただちに人間として認められる要件を具えているというわけではない。社会的動物たる人間の成長には、手塩にかけて慈しむ愛の手数が求められるし、しかるべき社会化の過程^{プロセス}もまた必要不可欠なものだからである。では、ヴィクター・フランケンシュタインは、いったいそのことにどう対処しようとしたのだろうか。

何ごとか物問いたげな我が子を一瞥しただけで、彼は、「ダンテですら思いおよばぬほどの怪物」(76)のおぞましい姿に仰天し、ひたすら「息も止まる恐怖と嫌悪」(75)に恐れをなして退散する。それは同時に、被造物の醜怪さにたじろぐあまり、最小限の養育義務さえかなぐり捨て、造物主たる者の責任を一向に引き受けようとはしないことを意味している。かくして生み出された人造人間は、^{すてご}棄児としての運命を甘受しつつ、フランケンシュタインの手にも負えない怪物^{モンスター}となって、次々と、戦慄すべき惨劇を惹き起こす。それはまた、生みの親をして、とどのつまり「身の破滅と免れえぬ不幸」(69)へと導いてゆく因果応報の起動因ともなりうるものなのである。

しかしながら、そのあまりに恐ろしい酷薄さに震撼された人間は、ひとりヴィクターのみにはとどまらなかった。おそらくは、人造人間の創造を、神の領域への挑戦と受け止めたであろう当時の読者たちもまた、ほとんど同じような心境に囚われたのではないかと思われる。それかあらぬか、彼らの多くは、「フランケンシュタインの怪物」を作品に描き出された姿のまま受け取ることには飽き足らず、その表象のなかに、むしろ何らかの寓意を見出そうとしないではいられないのだ。先に挙げた翻案の類いも、その種の代表例に属するものであるといえようが、仮に、類似性の一点をのみ手掛かりに、次元^{レベル}の異なるものにまで擬^{なぞら}えて、いわば「隠喩」として捉えようとするなら、むろん様々な解答例を数え上げることができよう。じじつ、モンスターに「フランス革命と革命群集」(今村仁司『群集——モンスターの誕生』、ちくま新書、146)とを重ねて読み取ろうとする試みを始めとし、すでにして、およそ考えられる限りありとあらゆる読解の可能性が提唱されていると言っていい(詳しくは、廣野由美子『批評理論入門『フランケンシュタイン』解剖講義』中公新書、ならびに最新刊の久守和子/中川僚子編『フランケンシュタイン』ミネルヴァ書房を参照のこと)。さらに加えて、今しばらく敷衍することが許されるなら、人間精神が手ずから考案しておきながら、自在にコントロールし得ないものの比喻表現として考えるとき、その対象となる範囲は、何も公害や原水爆といった具体的な人工物にだけ限定するいわれはないであろ

う。法体系や社会制度は言うまでもないとして、それぞれの時代時代に特有の自然観やら時間観念といった「パラダイム」(トーマス・クーン)もまた、否応なく、人々の生き方を規制して止まないものであってみれば、そもそもフェティッシュな存在様態から遁れることのできない人間精神の特性に起因する、ほとんど類似の妖怪^{ファントム}として捉えることができるように思われる。

とはいえ、「妖怪」や「化け物」は怖くて醜いものであるというイメージに幻惑され、無暗に想像を逞しくして試みるのがここでの喫緊の課題ではない。むしろ、野放図な妄想はひとまず慎んで、いま一度、メアリ・シェリーが描き出す具体的な叙述そのものに即くことこそ、かえって至当というべきであろう。そうしてみるなら、その身に纏った形相^{ぎょうそう}とは裏腹に、フランケンシュタインの被造物は、実は、「怪物」^{モンスター}のものとは思われない属性をも有つという意外な事実が判明する。

先にも触れたように、怪物の恐ろしさは、まずもって、身の毛のよだつその異様な外貌に顕著だとされた。しかも、彼の手になる惨劇のひとつひとつが、いずれも残虐な殺戮行為を主体としたものである以上、行く先々で蛇蝎のごとくに嫌われたとしても、なるほど致し方のないこととすべきかも知れない。しかしながら、その犯行が、決して誰彼の見境もなく、無暗矢鱈と無差別殺人を繰り返して憚らない体のものでない点には、十分な留意が必要である。すなわち、年齢の離れたヴィクターの末弟ウィリアムを皮切りに、相次いで毒牙に倒れる犠牲者たち、たとえば、ウィリアム殺害の濡れ衣を着せられて処刑される家政婦のジュスティーンであれ、怪物の逆鱗に触れて命を落とす親友のヘンリー・クラーヴァルや最愛の妻エリザベス、そしてまた、もっとも近しい者たちの度重なる変死^{シヨック}に衝撃を受けて憔悴死にいたる父親であるにせよ、そのターゲットは、もっぱらヴィクターの親族か、これと深い関わりをもった人たちだけに限られており、決して第三者からなる人類一般などではない。むしろ、怪物の意図は、縁^{ゆかり}も由縁もない無辜の人々にまで危害を加えることに向けられているのではなく、どうやらヴィクター一個人に対する復讐行為にこそあることを推測させるものなのである(— そうであれば、ひとたび復讐が遂げられた暁には、怪物の手によって、今後ともこの種の蛮行が繰り返されることはあるまいものと考えられよう —)。それにしても、それは、一体どうしてなのだろうか、そのことを知るためには、むろんのこと、怪物の言い分にもまた耳を傾けてみなければならない。

4. 三層から成る「語り」の構造と「怪物」の言い分^{モンスター}

一定の客観的情報を伝達することにのみ専心するのではない文学作品を読み解くには、単に、何が描かれているか（ストーリー）に留意するだけでなく、どのように叙述されているかについても注目を怠るわけにはいかないであろう。そのような眼で眺めてみれば、この作品のプロットは、作品外の語り手からするベタで一意的な「語り」によって運ばれているのではないことが明らかとなる。まず第一に、物語を説き起こし、語りの外枠を構成するのが、海洋探検家ロバート・ウォルトンの姉に宛てた何通かの手紙であるとすれば、その中に挟まれて登場するのがヴィクター・フランケンシュタインの回顧談である。彼の告白には、なるほど、父親や、のちに妻となるエリザベス自身の書簡なども挿入されているが、その中心をなすのが、怪物創造の^{いきさつ}経緯と回想であり、さらにその中で語られる^{モンスター}怪物の言説であることには何らの疑いをも差し挟めまい。殊に、フランケンシュタインの怪物は、亡命一家ド・ラセー家の離れ家に潜伏し、（— 親しいコミュニケーションを介してではないにせよ —）家族の動静を窺いながら言語を習得したというだけでなく、あまつさえ、ヴォルネーの『諸帝国の没落』の朗読を聞き、その後、プルタークの『英雄伝』やゲーテの『若きヴェルテルの悩み』までをも一読したとされるので、自らの思いの丈を述べ立てながら、ヴィクターに相対し、しっかりと論戦を挑むことができるという次第なのである。かくして、小説『フランケンシュタイン』は、少なくともロバート、ヴィクター、モンスターのそれぞれの語りが、いわば入れ子式に配置された三層構造をなしており、特定の一義的な価値観に収斂されることを許さない。その結果、三者の異なる声は、叙述される出来事やその背景につき、あるいは呼応し、あるいは補完しつつも、他方ではまた、相互に対立しあいもするという交響乐的な「ポリフォニー」（バフチン）を構成する。とりわけ、ヴィクターと^{かたき}モンスターの両者は、親子の間柄とは言いながら、いわば敵役同士でもあるだけに、ひときわ異質な声を響かせ合い、特徴的な対立関係を現出して止まないのだ。このように、^{ポリフォニック}多声乐的な語りの^{しつら}枠組みが設えられることによってはじめて、怪物にもまた、自らの想いを自身の声として響かせることのできる前提条件が整ったことになる。

ところで、モンスターの語るところを信じるとすれば、興味深いことに、彼

の人間化過程は、ほとんど系統発生的な人類の進化の経過を辿り直していることがわかる。すなわち、生得的な知覚能力の自覚に始まり、火の発見と道具の使用とを経て、次第次第に言語の獲得へと進んでゆくのである。ところが、そのことにのみとどまらず、さらに情愛や感情移入の機微にも目覚めるということになる、それはまた、怪物にとって諸刃の剣ともなりかねないものであろう。何となれば、彼が、せつかく習い覚えた言語表現を駆使するにもせよ、首尾よく心を通わせることができるのは、盲目の老人ただひとりだけであるし、ひとたび誰かに姿を見られでもしようものなら、たちどころに追い立てられ、爪弾きされてしまうという悲しい運命を甘受せざるを得ないのだからである。

フランケンシュタインの怪物は、最終章において、「自分が人とわけあいたかったのは、徳への愛、自分の全存在に満ちあふれる幸福と愛の思いだった」(294)と、その衷情を披瀝しては、「おれは愛と友情をいつも望み、いつもおれははねつけられた。これが不当なことじゃないと言うのか？」(295)と詰問する。このように、誕生の瞬間においてですらやさしく抱きとめてもらえなかったモンスターは、創造主から見捨てられ、こよなく「愛と尊敬の念」(144)を懐いていたド・ラセー一家からも迫害されて、孤独と絶望の淵へと追いやられる。そのしかるべき因果関係の果てに、「今初めて復讐と憎悪の念が」「激しい怒りが」(181)こみ上げてきたのだと告白している。

ひたすら拘泥するのは外見のみで、内面のくさぐさに関しては一顧だに払おうともしない人間社会に受け容れられず、「荒れ果てた山と寂しい氷河」や「氷の洞窟」(134)だけを住処とし、いわば流謫の身の上となって世界中をさ迷い歩かねばならない怪物は、森の山径で拾ったミルトンの『失樂園』を通読することを契機に、アダムたるわが身にも、伴侶となるべきイヴを作ってくれるよう創造主に所望する。そうした要求は、共感を分かちあえる家族と友人を乞い願う怪物にとって、いわば当然の「権利」(190)というべきものであった。ヴィクターは、いったんはこれを請け合い、新たな人造人間の製作に取り掛かるが、ついに最終局面に至って翻意し、やがて生まれてくるはずの「生き物」をずたずたにひきさいてしまう。伴侶の誕生にこそ「おのれの幸福を賭けていた」怪物は、未来の花嫁を殺害され、「悪魔じみた絶望と復讐の叫びをあげて」(218)、ひとまずは退散するというものの、こうした出来事が、親友クラーヴァルの、そしてまた、新婚旅行先でのエリザベスの惨殺へと繋がるのは、あまりにも明らかなことと言うべきであろう。かくして、フランケンシュタインの怪物は、

巨魁で恐ろしいとされるそのイメージとは裏腹に、人間的な苦悩に苛まれ、いたるところで愛と哀れみを乞い求め、いじらしいほどの努力をなそうともしているのだ。だからこそ、彼は、単に向こう見ずで軽はずみな親の犠牲者であったというだけでなく、もう一方ではさらに、氷原に雄叫ぶ心優しき求愛者としての側面をも覗かせていることが決して忘れられてはならない。

5. ロバート・ウォルトンの私信を読む姉マーガレットと「モデル読者」

小説作品『フランケンシュタイン』の語りが、少なくとも三層からなる「入れ子」構造であることについては先述した。では、その一番の外枠を構成するロバート・ウォルトンのそれが、ロンドンにいる姉宛の私信であることには、何かしら積極的な意義を見出すことができるのだろうか。忖度するところ、どうやらまだ独身である28歳のロバートは、もっとも身近な存在で、また高い教養人でもあるらしい姉をターゲットに、ひとり遠く離れた故国への郷愁を慰めるとともに、北極探険という自らの壮図に関しても、深い理解を求めないではいられないのだ。やがて、北極海に乗り出したウォルトン一行の探険船は、厚い氷の山塊に閉じ込められ、行く手を遮られて立往生を余儀なくされる。折しも、犬橇に乗って怪物を追跡する道すがら、危うく遭難しかけたヴィクターを助け上げたロバートは、瀕死の状態に陥った賓客を介抱しつつ、その身の上話に耳を傾ける。どうやら肝胆相照らす同類であることをすばやく感じ取ったウォルトンは、時ならぬ珍客を「兄弟のように愛しはじめ」(35)「客人に寄せるぼくの愛情は日ましに強くなってゆきます」(36)という思いを深めずにはいられない。その結果、これ以降の顛末を伝える四通目からの書簡群は、にわかにもその分量と頻度を増大させることとなる。

ほぼ一週間にわたって聞き届けたヴィクターの語りを、ロバートは、「できるだけ本人の言葉そのままに書きとめることに決めました。」そして、「この原稿は、姉さんにもとても面白く読んでいただけること間違いなしです」(40)と書き送っている。それにしても、姉への私信が、そのまま読者にも開かれているという物語の構成から察するとき、これらの手紙は、実は、私信を装った公開書簡とでも呼ぶべきものではないのだろうか。果たせるかな、第四信をも含め、作品世界を締めくくる最後の便にいたるまで、フランケンシュタインとその怪物に言及した書信のことごとくが、それまでのものとは異なり、親しく差出人の署名をもっては閉じられていない事実も、ひよつとすると、そのひとつの傍

証になると言えるかも知れない。だとすれば、弟の私信に目を通す姉マーガレットの延長線上に、同じく共感をもって読み進んでくれるような読者像、すなわち「モデル読者」が想定されているものと考えることができよう。

では、「モデル読者」とは、いったいどのような存在なのか。それは、必ずしも誰彼という具体的で経験的な読み手のことを指して言うのではない（— そもそも実在の読者は、当然のことであるとはいえ、通常、各々がまったく手前勝手な読み方をするものなのだから —）。そうではなくて、テキストを十全に成立させるべく、作者との生産的な共同作業へと誘われる理想的な読者像、いうならば「あらまほしき読者」のことを意味している。⁶⁾ それでは、メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』において、より具体的には、いかなるモデル読者が期待されていると言えるのだろうか。そのことを探るためには、さらに今一步踏み込んで、ロバート・ウォルトンが認^{したた}める言説のゆくえをも見届けてみなければならない。

6. ロバートとヴィクター — その言動に見られる同質性と差異

ところで、もっぱら犠牲者に擬せられた「怪物」の語りを別格とすれば、ヴィクターとロバートとの間には、幾多の面において同心円的な相同性と重なりとを見出すことができる。それはすでに、両者の言説に明らかであると言えようが、むろん、そのことばかりに限定されるものではない。ヴィクターが、人造人間の製作という「創造」行為に熱く駆り立てられていたように、ロバートもまた、ロシア領アルハンゲルスクから北極圏へと通じる、まったく新たな航路の「発見」を目指した船旅の途上にある。

「ぼくは実行にはやりすぎ、困難をじっと辛抱することができない性質^{たち}です」(25) と自認するロバートは、「不可思議なものを愛する心、不可思議なものを信ずる気持が、ぼくのすることなすことすべてについてまわって、世の人並みの道から、これから探険しようとする荒海や訪れる人もない地域へとぼくを駆りたてるのです」(28) と自己分析して見せている。そのような気質と性格は、さらにロバートに対する次のような態度にも、そのまま反映して現われていると言っている。「ぼくは思わず真情をぶちまけ、魂を焦がす熱い思いを語りました。そしてこの身を駆りたてる情熱のありったけをこめて言ったのです。この企ての推進のためなら、財産も生命も、あらゆる希望も、投げうつことをいとわぬ。人ひとりの生死など、それでぼくの求める知識が手に入るなら安いも

のだ、それで人類の敵たる自然の諸力を支配する力をこの手におさめ、後代に残すことができるのであれば、と。」(36) 血気にはやるふたりの若者は、かくの通り、たとえ初対面ではあるにしても、ほとんど同種の野望と情熱に取り憑かれているがゆえに、早晚、肝胆相照らす仲にもなりうるという好一對の人物として設定されているのである。

いわば同病の^{よしみ}誼で、そのことを敏感に察知したヴィクターは、「不幸な人だ！わたしの狂気が、あなたにもとりついているのか？あなたもあの美酒に酔っていると？」(37) と、嘆きの声を上げつつウォルトンをたしなめ、「平穩のなかに幸せを求め、野心をお避けなさい。たとえ科学や発見で名をあげるといふ、一見罪のないものにすぎなくとも。だが、なぜわたしがこんなことを言うのか？わたし自身はそれを望んで身を滅ぼしたが、ほかの人はやりとげるかもしれないのだ」(289-290) と、耳の痛い諫言をも厭わない。

果たして長々と物語られた身の上話にほだされたのでもあったろうか、すでに何人もの犠牲者を出し、このまま探険行を続行すべきか退くべきかの岐路に立たされていたロバートは、しばしの思案をしたあげく、乗組員たちの要望を容れ、ふたたび^{そうだ}操舵が可能になるや、ただちに祖国イギリスへと取って返すことを約束する（— こうして、今や、「モデル読者」へのメッセージが、奈辺に存するのかは明白になったと言うべきであろう —）。ところが、そのような決断に対しても、この期に及んで、（— それはまた、いまわの際に臨んでということでもあるのだが —）なおも異議を申し立てて憚らない人物が、たったひとりだけ存在するのである。それこそは、誰であろう、ヴィクター・フランケンシュタインその人に他ならない。奇妙なことに、彼は、懺悔と自責の念を述べ立てる一方で、今なお怪物に対する復讐の妄念に囚われたがごとく、「高邁な意志とヒロイズムに満ちたまなざしで」(285)、次のように隊員たちをけしかけて止まないのだ。

「どういうことだ？きみたちの隊長に何を要求しているのだ？諸君はそれでは、そんなにあっけなくもくろみを捨ててしまうのか。諸君はこれを輝かしい遠征と呼んでいたのじゃなかったのか。そして輝かしいのはなにゆえだ？南の海のように平坦で穏やかな^{みち}途に行くからじゃない、危険と恐怖だらけの途だから、新たな出来事にぶつかるたびに諸君の忍耐を呼びおこし、勇気を示さなくてはならないからだ。危険と死とにかこまれて、ものともせずにより越えてゆかねばならないからだ。だからこそ輝かしいと言えるんだ。だからこそ誉れあ

る企てなのだ。諸君はこののち、人類の恩人としてたたえられる。諸君の名は、名誉と人類の利益のために死に立ちむかった勇者の名として、崇められることだろう。それがどうだ、見ろ、初めて危険を想像してみて、と言って悪けりゃ、勇気をためず初の恐るべき大試練をむかえてみて、きみらはおじけづき、寒さと危難に耐えるだけの力がなかった連中として名を残すことに満足するのか。寒い寒いと、あったかい炉端に帰ってゆく。哀れなもんだ。そんなことなら何もこんな準備はいりやしない。自分たちが意気地なしだと証明してみせるのに、はるばる出てきて、きみらの隊長を敗北の恥辱にひきずりこむことはなかったんだ。諸君！男になりたまえ、いや、男以上のものになれ。ぐらつかず、岩のように断固として目的に向かいたまえ。氷はきみたちの心のようなものではできていない。うつろいやすく、諸君が邪魔するなと言えさからうことはできないのだ。家族のもとへ帰るなら、額に不名誉の烙印を押されて帰るな。戦い勝った者として、敵にうしろを見せることを知らない英雄として帰りたいまえ。」

(285)

明らかに前後で相矛盾したこのような口吻くちぶりを、もはや、自ら望まぬ道化と化したヴィクターの虚仮こけの一念として一蹴することができようか。⁷⁾ 仮にも、そうでないとするなら、そうした妄言の裏には、もしかして、一義的で平板な読解を攪乱せんとする作者の狡知がひそかに仕込まれているのかも知れないのである。あるいは、ここに、フランケンシュタインの物語が、決して特異な例外にとどまるものではないという可能性が、しっかりと見据えられているのだと言い換えることもできよう。すでに触れたように、ヴィクターは、生まれつき、神の領域をも侵犯せんとする妄執に取り憑かれていたわけでは決してない。そうではなくて、環境と教育を通じ、あくまでも後天的に育まれていったに過ぎないのだ。だとすれば、遺伝子操作やクローン人間の可能性が喋々されてすでに久しい今日、狂信的な科学者予備軍は、今後とも、なお陸続として立ち現われてくることが予測される。(そのような意味では、「モンスター」以上に「怪物」たる属性を具えているヴィクターを、フランケンシュタインの怪物そのものと取り違える錯認もまた、あながち的外れではないとすべきかも知れない。) いずれにしても、『フランケンシュタイン』一卷は、初出から 200 年近くも経った 21 世紀においてこそ、ますますその今日的意義アクトチュアリーを高めつつあるのだと見ることができよう。⁸⁾

註

- 1) 試みに民俗学の知見を参照してみるとするなら、たとえば、宮田登は、ハレとケとケガレという三者の相互関係に着目し、「ケガレは一見ハレと対立するように見えるが、深層部分ではハレとケガレは共存している。ケガレを排除することによってハレが成立するという理解が成り立つ」（『怖さはどこからくるのか』、筑摩書房、41ページ、以下、頁数のみ記すこととする）とした上で、「人間の生命力の総体というべき『気』(51)が持続しえなくなった状態、すなわち「^{けが}気離れ」を除去する操作が「ハラエ」の行為となる(108)と述べている。つまり、ケ→ケガレ、ケガレ→ハレという循環を^{つづ}無く司り、祓いによって「一つの境界領域」(51)を克服すること、つまりは、衰退したケの回復の中にこそ、民俗的な儀礼のもつ重大な意義を見出していることが分かる。
- 2) 作中、主人公が師事することになるインゴールシュタット大学の化学の教授ヴァルトマンが、奇しくも、次のように語る一幕は、当時の先端的な科学観を窺うに足る、代表的な一節というべきであろう。「— 現代の科学者は — 自然の深奥を看破し、自然の隠れ家における営みを明らかにする。彼らは天にも昇ってゆく。血液の循環が、われわれの呼吸する空気の性質が、すでに明るみに出されております。科学者の得た力は新しく、ほとんど無限と言ってもよい。天のいかずちを支配することも地震を真似ることも、不可視の世界に本物そっくりの影を造ってみせることさえも、できるのであります」云々（森下弓子訳、創元推理文庫、62-63）。
- 3) 周知のように、反復と移調こそが、「おかしみ」の基底をなすものであると、ベルクソン（『笑い』）は説いている。『フランケンシュタイン』もまた、ご多聞に洩れず、繰り返し翻案されることを通してパロディーにもなり、やがて、喜劇やお茶らけへと変質した場合も皆無ではなかったが、恐怖の原像のひとつを作り上げたことには疑いの余地がない。それはとりもなおさず、日本映画のお家芸であったゴジラやその他様々なシリアス怪獣などとほとんど同じ軌跡を辿ったということでもある。
- 4) 「怪物」は、アルプス山中で出くわしたヴィクターに向かって、「呪われた創り主よ！おまえまでがむかついて顔をそむける、そんなおぞましい怪物を、なにゆえに創りだしたのだ？神は哀れんで人をみずからの姿に似せ、美しく魅惑的に創りたもうた。だがこの身はおまえの汚い似姿で、似ているからこそいっそう身の毛もよだつのだ。サタンには仲間の悪魔どもがいて、崇め、勇気をあたえてくれた。だのにおれは孤独な嫌われ者なのだ」(171)と、慨嘆しつつ告発する。仮に、この通りであるとするとするなら、ヴィクターは、モンスターの製作を通して、まさしく自らの似

姿としての分身を作り出したということになる。

- 5) メアリ・シェリーの生きた時代は、いまだ生命科学の黎明期に当たっていた。しかし、そうであるがゆえにかえって、新たに胎動してくる時代の問題性が、一層くっきりと際立つものとして捉えられたのだと見ることもできよう。因みに、度重なる悲劇を体験し尽くした後のヴィクターの述懐においては、たとえば次のような反省の弁も語られている。「もしあなたのなさる研究に、愛情を弱め、どんな不純物もまじりえない素朴な楽しみを味わう力をそこなうきらいがあるようなら、それは、その研究が不法なもの、つまり人間の精神に不相応なものとして間違いない。」(72)
- 6) 「モデル読者」という概念については、ウンベルト・エーコによる『物語における読者』（篠原資明訳、青土社）が明快である。エーコは、作者の「考えていたおりに、テキストの顕在化」(87)に協力すべく誘われるような読者のことを「モデル読者」と呼び、「モデル読者とは、ひとつのテキストがその潜在的内容を十全に顕在化されるために、充たされるべき幸福の条件、それもテキスト的に確立された条件の集合のことなのだ」(97-98)と定義している。
- 7) 死の直前にいたるまで、「あいつが生きのびて悪の手先となることだけが気がかりです」(289)と懸念しつつも、ヴィクター・フランケンシュタインは、酷寒のあまり衰弱し、ついに探険船上でこと切れる。一方、作品の終幕にいたって、あらためてウォルトンの眼前に出現した怪物は、彼と差しの会話を交わしながら、さまざまに言葉を継いで、その断腸の想いを叫ばずにはいられない。「これもまたわが犠牲！」「彼を殺しておれの罪は完成された。このみじめな生もやっと終わりにたどりついたのだ！」(291)「この先おれが悪事を働くだらうなどとは心配するな。わがおこないの成就是まちか。この生涯をまっとうし、なすべきことを仕上げるには、おまえの死もほかの人間の死も必要ない、ただ自分が死ねばそれですむ。」(295)「地球の最北の果てへ行く。とちの薪を積みあげ、このみじめなからだを燃やして灰にしてやろう。その残骸が詮索好きの不浄のやからに光をあたえ、自分のようなものがまた創られることのないように。おれは死ぬ。」(296)「今は死がたったひとつの慰めだ。罪に穢れ、にがい悔恨にひき裂かれて、死以外のどこに安らぎがある？」(296)等々。このように、絶望のどん底で打ちひしがれ、従容として死に赴く怪物の意志を、もはや誰にも疑ういわれなどないのだと見るべきであろう。
- 8) なるほど、脳科学や生命工学がさかんにもてはやされるようになった今日においてさえ、操縦器によって外から操る「鉄人 28 号」レベルのロボットならいざ知らず、自らの意志をもって行動する「鉄腕アトム」タイプの製作は、どうやらまだ当分のあいだ成功する見込みはなさそうである。とはいっても、大衆的な好奇のまなざしと射幸心が、科学者の恣意や野心を煽りたて、マッド・サイエンティストの叢生を可能ならしめるのだとするならば、「フランケンシュタイン」に見られる悲

劇の可能性は、今後とも、なお完全に排除することはできないものと受け止めなければなるまい。